

願わくは甲子園出場

紙上座談会出席者

佐々木 満氏 (15期―昭19年卒)	大山 正晴氏 (18期―昭22年卒)
菊谷 良己氏 (34期―昭39年卒)	小笠原忠澄氏 (36期―昭41年卒)
船山 誠氏 (40期―昭45年卒)	武田 隆氏 (44期―昭49年卒・現鎌倉学院高校監督)
東海林憲昭氏 (48期―昭53年卒)	納谷 聡氏 (52期―昭57年・現鷹巣農林高校監督)

野球を始めたきっかけは

佐々木 私が小学校時代を過ごした旧山田村は湯沢の在の本当の田舎だったので、中学校（旧制）に入った人もほとんどいない。従って正式な野球をやった人は一人もいなかった。同好の子供らとゴムボールで野球のまねごとみたいなことをやった。父が母校早大の野球部の大ファンだったので、ラジオで大学野球の放送を聞くのが楽しみだった。

大山 小学校4～5年生の頃に遊んだ「三角ベース」で遊び始めたことがきっかけ。

菊谷 最初の頃は打つ喜びが一番だった。本格的に始めたのは能代二中入学と同時に野球部に入部した時。とにかく毎日の練習が楽しかったと記憶している。

小笠原 私が小学生の頃、現在の能代市民球場で現役の早慶戦が開催され、当時教師だった父に連れられて観戦したのが大きな刺激になった。将来は早稲田で野球をやりたいと思っていた。

船山 通学した第五小にはグラウンドがなく練習らしい練習が出来なかったが対抗戦に選出され、野球の面白さを体験できた時から。

武田 子供の頃から能代高校の野球を応援して、自分も甲子園に行けたらと思って始めた。

納谷 祖父に薦められて。

東海林 時代性・能代という地域性もあり、当時ではスポーツといえば野球しかなかった。バスケット、サッカー、ラグビーでもなく、近所の友達と三角ベースを遊んでいた。周囲で親子がキャッチボールする家族が多く、野球が自然に生

活の一部となっていた。

硬式野球部入部のきっかけは

佐々木 昭和14年3月能代に引っ越したが、友達もいないし、たまたま樽子山に住んでいたので、能代中学（旧制）の入学までの2週間、毎日のようにグラウンドの土手に座って野球部の練習をみていた。入学式の当日、私の顔を覚えてくれていた3年先輩の金谷忠治さんに勧められて入部した。

大山 昭和21年、終戦後、野球部活動が再開された時、既に入部していた同じ町内の吉方盛恭君や、同級生の佐藤勇一君に誘われて能中野球部に入部した。

菊谷 能代二中3年の秋、担任の柳谷先生に「能代高校を受験した方が良い」と言われて、入学と同時に何の迷いもなく入部した。（但し入学式前の春休みの特別練習に参加したように記憶している。）

小笠原 甲子園でプレーしたい一念で。

船山 兄が能高に在籍、その影響と伝統の能代高校野球部にあこがれたから。

武田 甲子園に行きたくて。

納谷 ユニフォームに憧れた。高松直志さんみたいになりたくて。

東海林 ①中学3年の時、県大会1回戦で敗退した後、夏休みに父が甲子園に連れて行ってくれた。甲子園での試合（東海大相模）を観て自分もここ甲子園で試合をしたい、しなければならなかった。②秋田県内でも伝統ある能代高

校で野球を行い、甲子園をめざすことは私にとっては自然であり、尊敬する太田監督の下で甲子園に行きたいと思ったから。

野球を続けて良かったことは

佐々木 小学生の頃、気が小さく、いじめられればすぐ泣く気の弱い子供だったが、それを一転して、ものごとに挑戦する勇気と何事にも負けない根性を持つようになった。小学生の恩師からは「人が変わった」と驚かれた。これは野球部生活で鍛えられたおかげであり感謝してる。

大 山 ①野球部の平川監督・先輩達より厳しく指導され、その苦勞と負けじ魂を教えられた。②野球はチームワーク・団体生活の大事なことを教わり、人生における個人としてのファイト、厳しさを学ぶことができた。③当時は、野球をやってきたことが、就職上有利となった。

菊 谷 素晴らしい仲間、先輩と出会えたこと。特に能代高校硬式野球部での3年間は一生の宝と思っている。

小笠原 ①幸運にも入学早々に先輩の皆様が甲子園初出場を達成し大阪に同行を許され、その上わずかな時間ではあったが、甲子園球場割り当て練習でグラウンドに入り、土を踏み大いに感激したのは今でも鮮明に記憶している。②2年の現役時代は3年生のお陰で東北大会優勝、新潟国体出場など、色々な大会に出場できた。野球をやってきたお陰で多くの人々と知り合えるきっかけとなり、現在の職業にも大いに役立っている。

武 田 一生付き合える仲間や先輩・後輩に出会えたこと。高校生活の充実感。

船 山 精神力と協調性が養われた。交友関係が広がった。

東海林 なんととっても社会人になってから、厳しい状況の中でも耐えられていけることだ。また、努力すれば夢は実現するということが能代高校硬式野球部で学ぶことができた。私にとっては高校3年間で今でも心の支えとなっている。

る。

納 谷 上下を含め仲間を沢山つくったこと。結婚式に野球部の同期全員が出席してくれて感激した。

合宿・キャンプの思い出は

佐々木 樽子山のグラウンドのライトの後ろの階段を下りたところに寄宿舍があり、その教室を借りて合宿生活が行われた。思い出は沢山あるが2つだけ。①昭和15年、初めての甲子園出場が有望視されていた夏の大会を前にしての合宿・我々2年生は文字通りの雑用係だったが、5年生の長谷川（西村）全蔵さんが夜遅く疲れた体に鞭うって英語の勉強をやっていたのに甚く感動した。②4年生の時の夏の大会直前の合宿。ものの不足の時代、私の野球部生活を精神的に支えてくれていた同級生の佐藤直正なる男が、当時ほとんど目にすることもできなかった生菓子をカゴいっぱい持ってきてきて激励してくれたことが懐かしく思い出される。

大 山 ①能代駅前の勝永旅館に合宿し、チーム皆で練習の行き帰りに応援歌を歌って歩き、旅館（合宿）生活の楽しさを味わったこと。②炎天下の全県大会試合中、先輩達が駆けずり回って、他校にはない氷水をベンチに準備してくれて、自由に飲みながら頑張ることができた。

小笠原 1年生の時は日鉱日立のお世話になり、日立市に行った。能代と比較すると温暖で何と住みよい所かと、同じ日本国内かと疑ったほどで、将来はここに住みたいと思ったほどでした。2年生の時は千葉九十九里の大網白里でした。ここでは法政大出身、千葉商コーチ望月さんとの出会いが印象的でした。魚の干物がおいしかった。練習の記憶はほとんどなく、楽しかった思い出だけです。

船 山 合宿での個人ノックが一番つらかった。

武 田 朝・放課後・夜のつらい3部練習と終わった後の達成感。栄養満点で量の多い食事。

東海林 「辛い」の一言ですね。早朝から深夜ま

での練習づけの日々であり、授業中が安息の場でした。続先生、金谷先生本当にありがとうございました。千葉でのキャンプは一足早くグラウンドで野球できる喜びを体感できました。

納 谷 ①1年秋の合宿。夜練、雑用で就寝はAM3:00、起床、朝練はAM5:00。金野浩が「いつ寝ればいいんですか」と尋ねたところ、「授業中寝ろ」。②2年の茂原での春季キャンプ。銚子商1-0能代。あの試合はすごかった。

金属バットになって 高校野球は変わったか

菊 谷 折れないバットがもしも我々の頃あったら……あんなに投手に苦勞をかけなかったかもしれない。とにかく金属バットは間違いなく高校野球に「打高投低」化をもたらしたと思う。

大 山 ①我々の時代は木製バットでした。バットが不足していたため、練習や試合では、バットを折るのではないかという心配が先走った。②今は金属バットで思いっきり打つことができる。打撃優先のチームづくりが必要であると思う。そのため打てる選手を優先した人選配置となっていく。③精神面の強さと共に打つ瞬間ボールが止まって見える感じで打てるようになり、確実に遠くへ飛ばす方向へ進むだろう。

小笠原 我々の頃は竹か木製の材質のものしかなく、比較できないが、使える時代であったら、もしかしてホームランヒッターになれたかも。

船 山 観戦する側からすれば金属音によって野球を観る楽しさが増した。長打が増える醍醐味があり面白い。

武 田 変わったと思う。何とんでも木製バットの時代に比べて、打者が圧倒的に有利になった。その打者を抑えるために、投手には今まで以上の球威、コントロールが要求される。投手難の到来の時代である。一人の投手で夏の大会を乗り切るのは難しい。守る野手にとっても打球が速くなった分、動きの俊敏性が求められる。外野手は深く守るので、肩の強さ、脚力が必要

になる。打撃技術は金属バットが易しいが、守備においては以前より高い能力が要求される野球に変わったと思う。

東海林 バッティングが技術からパワーに重点が置かれるようになった。メジャーリーグマリナーズのイチローは当時から木製バットで練習していたと聞く。プロ野球で即戦力で活躍できるのは比較的ピッチャーが多く、バッターが少ないのも金属バットの影響でしょうね。

納 谷 自らが現役の頃は既に金属バットが使われていたので木製バットのことはよくわからないが、あきらかに変わったと思う。一概に言えないが技ではなく力が要求されるようになったと思う。逆に投手は力だけでは勝てなくなった。

能代高校野球のもろさ・弱さは

大 山 ①仲良しチームではなく、勝てる高校野球チームであってほしい。②ピンチにおいては、弱さからチーム全体がおとなしくなる。もっと強気であれ。③今までの試合では、強いファイト・闘争心の不足を感じた。もっと出すこと。④指導陣には厳しさ・指導力の不足が見受けられた。これからは、特に試合中、適切な対処・アドバイスをされたい。

菊 谷 投手力を含めた守りの弱さを指摘したいですね。野手には肩が強いこと、体ごとボールに向かう気力がほしい。絶対的なエースの育成は欠かせない。

船 山 格下のチーム、相手校に合わせた試合をしてしまうことが度々ある。

東海林 毎夏帰省はできないが、帰った時は必ずグラウンドに行くようにしている。挨拶やきびきびした行動は足りないように思う。明確な目的を持った練習、バックネット裏で見ている人にも目的のわかる練習をしてほしい、させてほしい。

武 田 最近のチームは見えていないので分からないが、数年前に見た感想を述べる。投手の配球術や走塁、打者の狙い球など試合慣れしていな

い感じがした。試合形式の練習を徹底的にやる必要があるのではないか。5、6月の練習はそれだけでよい気がする。

納 谷 よくわからないが、時代につれて生徒も環境も変わってきているので、昔と今では意味が違ってきていると思う。今の選手はねばり強さが足りなくなっている。

高校野球の果たす役割は

大 山 ①甲子園出場ともなれば、地域活性化の起爆剤となり得ること。人心の高揚となって表れる。②選手一人ひとりにとって、人生の青春時代の非常に良い修練の場であり、人間性を教示・育成する重要な教育的価値を担っている。

菊 谷 厳しい練習で心身を鍛え、その成果を試合で十分出し尽くしたときのさわやかさ。そして仲間との連帯感。監督、諸先輩への感謝の心など、人格形成上大変役立つものと思う。

船 山 バスケットは全国優勝しても大きな話題にならないが、野球は全国大会である甲子園に出場ただけで市民が歓喜し街に活気が出る。

武 田 国民的行事で多くの人々が趣味を持っている。潑刺としたプレーが皆に元気を与えると思う。学校においては、野球部の活躍は全体の一体感をもたらす。

東海林 社会の縮図が凝縮されているのが高校野球。先輩と後輩の関係、監督と生徒の関係、生徒と応援者等、上下関係や礼儀を学ぶ、身につける場ですね。また、実力次第で下級生が活躍することもあり、仲間への思いやりを学ぶ最高のステージだ。

小笠原 テーマが大きすぎて私凡人には良くわからない。ただ、春といい、夏といい甲子園の時期になると全国的に話題沸騰している現象を見ると何かしらの意味を成しているのでしょう。特に地元高校が出場していれば波及効果は相当なものでは？

納 谷 人間形成。地域の活性化。

監督・部長のあの一言が忘れられない

佐々木 4年生の秋、新チームの主将に指名されたが、当時私は高校（旧制）進学を決意していたので、「受験勉強もしたいから主将はカンベンしてもらいたい」と申し出たところ、伊藤廉監督に叱られた。「野球と勉強と両方やれ、困難なことに挑戦するのは男の本望じゃないか」と。この一言が忘れられない。爾来、「困難なことだからこそ喜んで挑戦しよう」と言うのが私の座右の銘となった。

大 山 ①平川監督より、くどいくらい徹底して実技やルールを教えこまれたこと。②先輩達が多数練習に来て1対1で実技を教えられ、繰り返し練習させられたこと。

菊 谷 部長「君達はウドの大木か!!」

監督「野球愛と野球部愛。元気は高校野球の生命である」。

船 山 ミスした後の“打て”の指示が印象深い。

武 田 現役の時、大学4年で就職が決まった時の言葉、「どんな時も泣き言を言うな」。

東海林 「勝つ」というこだわりの時には恐怖すら感じたことがあった。今は良い意味での物事に対する執着心と諦めず最後までやり抜く力を養うことに繋がっている。「熱と力と団結は俺たちのすべてだ」の一句が忘れられない。

小笠原 2年生の夏、西奥羽地区大会決勝でスクイズのサインが出て見事に空振りをしてしまった。それまではバントの失敗はほとんどなく、自信をもっていたのだが。これは私の痛恨の極み。能代に帰る汽車の中で監督さんが隣の席にきて「あの球、あでらいねがったが」との一言。うまくいったら2年連続甲子園出場だったかも。

納 谷 1年の夏、試合形式で練習していた時、2塁を守っていた自分が連続エラーした折、田辺さんに「納谷おめいはいはずれる」と言われファールグラウンドにはずれた自分に、金谷部長が歩み寄ってきてくれて、「ああいうこと言われても、もう1回やるもんだ。しらねふりして

守備につけ」と言ってくれた。下手くそだった自分にとってどれほどうれしかったことか。守備についた後、またすぐにエラーして、田辺さんに「おめ、いらねっていったべ」と言われた。期待にそえなくてスミマセン。

甲子園の思い出 (野球部が私を培ってくれたもの)

菊 谷 甲子園では練習しかできなかった。クジ運が悪く試合は西宮球場。今も仲間に申し訳なく思っている。

船 山 何事にも一生懸命取り組む姿勢を育ててくれたこと。

武 田 少々のことにはへこたれない強い精神。

東海林 甲子園大会に出場することが目的で、甲子園で勝つ意識が希薄だったことが大きな反省である。振り返ってみると、緊張して夢の中で野球をしていたようなものだった。

小笠原 小、中、高、大学の仲間から、或いは応援してくれた地域の多くの方々から、自分にはないものを数多く教えていただいた。野球をやったからこそ経験できたと思う。団体競技、チームプレーの面白さと難しさ……計り知れないものがある。反動ではないが、今は個人プレーのゴルフを楽しんでいる。

納 谷 舞い上がっていたのでよく覚えていない。出来れば選手で出たかった。大阪にいた時はOBの皆さんによくしていただいて大変ありがたかった。

野球部に期待する事柄は

大 山 能代・山本地域中学生の上手な有望選手が市内の高校に進学せず、秋田市内各校にとられている現状の打開を図ることが必要です。②能高野球部が強くなって、各校のレベルを引き上げるようなチームづくりに必死になり、努力すること。③そのため監督の技術力と、選手を惹きつける魅力ある指導力を十分に発揮して、

強い勝てるチームを作ることを期待する。

船 山 投手は投手らしく、野手は野手らしい選手を育成してほしい。それが甲子園出場の一番の近道であると思う。

菊 谷 もちろん全国大会の出場と東北勢の初の全国制覇。

東海林 ①「高校はどこですか」「能代高校です」「あーあ、バスケの強い高校？」と言われる。「高校はどこですか」「能代高校です」「あーあ、あの野球の強い高校ですね」という言葉が返ってくる学校であることを願っている。②社会が複雑になってきている今日、社会人になって役立つ教育を、部活を通してやってほしい。グラウンドが人間形成の場であることを指導者も部員ももっともっと意識してほしい。

小笠原 とにかく甲子園に行ってほしい。出場できた選手の皆さんの人生はバラ色に間違いなし。夢の達成が叶わなかった元球児の一人として切望したい。

武 田 やはり甲子園出場。険しい道でしょうが常に挑戦してほしい。それと多くの高校野球ファンが求めている、時代が変わっても昔から変わらぬ高校野球の精神をいつまでも継続してほしい。

納 谷 能代高校野球部には「豪傑」というイメージがある。それだけは失わないでほしい。

最後に言い足りなかったことをどうぞ

佐々木 開会式などでよく「スポーツは勝負だけを争うものではない」という言葉を聞く。それはその通りだが、私は同時に勝負を離れてスポーツは成り立たないと思う。勝つために頑張る、そのために互いに助け合い、補い合って練習に汗と涙を流す。そこにとくに学生スポーツの意義があると思う。努力の結果も大事だが、努力の過程そのものが尊いと思う。

本校に限ったことではない。秋田の高校野球は一般的に鍛えが足りないと思う。とくに個人ノックが足りない。体に覚えさせるには反復練

習しかない。高校時代は「限界に挑戦してみる」ことが大事だ。「精神的にも肉体的にもどこまで自分に耐えることができるか」そのギリギリに挑んでみることは長い人生で極めて有意義だと思うので、それを野球の練習を通じてやってもらいたい。そういうことのできるのは高校時代だけだから。

「感激なき人生は空虚なり」という言葉がある。厳しい練習を積んで感動に満ちた高校生活を送ってもらいたい。

私の野球生活は能代中学、能代高校を通じて一番弱かった時代だった。それでも練習さえやれば必ず甲子園へ行けるものと思いこんでいた。今までの80年の人生の中で、ひたすら野球に打ち込んだあの頃が心身とも最も充実して

いたように思う。そういう時期をもつことができたことを幸せに思う。

一昨年夏の甲子園大会でのこと。広陵高の中井監督が試合前のシートノックで、セカンドの上本なる選手を、左右に交互に強烈なゴロを打ってグラウンドにはわせた。スタンドから万雷の拍手が起こった。これは全国高校野球の監督に対する「もっと鍛えるべきだ」という中井監督のメッセージだったと思うし、スタンドからの拍手はそれへの共感だったと思う。

監督も保護者も観客も選手に甘すぎる。特に選手を英雄扱いするマスコミの態度は高校野球を毒するものだ。修行中の少年たちであることを忘れてはならない。もっと鍛えるべきだ。

